The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	記念用プリント・テキスタイルにみられる国民国家の視覚化 : 1953 年エリザベス二世戴冠式から新生アフリカ国家イメージまで
Author(s)	門田, 園子
Citation	デザイン理論. 2023, 81, p. 17-31
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91054
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

記念用プリント・テキスタイルにみられる国民国家の視覚化
1953 年エリザベス二世戴冠式から新生アフリカ国家イメージまで

門　田　園　子

キーワード
記念用プリント・テキスタイル，横浜（製）スカーフ，国民国家の表象，民族とナショナリズム，アフリカ独立
Commemorative Prints and Textiles, Yokohama Scarves, Representation of the Nation-State, Ethnicity and Nationalism, Independence of Africa

はじめに　問題の所在
1. 国民国家の視覚化
2. エリザベス二世の肖像柄プリント・テキスタイル
3. 独立前後の記念用プリント・テキスタイル
おわりに

はじめに　問題の所在

英国女王エリザベス二世（在位 1952–2022）の肖像イメージをもとにしたプリント・テキスタイル，横浜で製造されていた捺染スカーフは 1950 年代後半，英領西アフリカ植民地，とくに独立後のガーナにあたるゴールドコーストの首都アクラ，ナイジェリアの首都ラゴス，国王直轄植民地であったシエラレオネに輸出されていた。女王の肖像はセシル・ビートン（1904–1980）やドロシー・ワイルディング（1893–1976）ら王室御用達の写真家や，英国放送協会（BBC）による戴冠式の TV 中継から複製されたが，複製が繰り返されるうちに，オリジナルとの乖離が見られる場合もあった。これらのプリント・テキスタイルは英国の特許貿易会社であるアフリカ統一会社（= United Africa Company，以下 UAC）などの植民地経済を占拠し，英国政府の代わりに植民地の政治にも介入していた巨大商社の発注によるものが多く，人件費の安い日本その他アジア諸国で製造されていた。デザインの著作権は UAC が保持していることが多かったゆえ，女王柄のアフリカでの普及には供給側の英国の意図があったと考えられる [1]。

本論はエリザベス二世のような宗主国君主の肖像イメージを使った commemorative print，すなわち記念用プリント・テキスタイルがなぜ反植民地主義ナショナリズム運動，パン＝ア

本論は，第 63 回意匠学会大会（2021 年 9 月 11 日，九州大学主催）での発表にもとづく。

フリカニズムが高まっていた英領西アフリカ植民地に向けて製造，輸出されていたのかという疑問を出発点としている。ここでは宗主国の君主イメージが独立前夜のアフリカに拡散した背景を，国民を「想像の共同体」と表現した政治学者ベネディクト・アンダーソン，民族をナショナリズムの産物と捉えた歴史家アーネスト・ゲルナーの理論，そのほかアフリカの国民国家制度の確立とその視覚化にまつわる論考を踏まえ，独立直前，独立後にもたらされた記念用プリント・テキスタイルとの類似点，相違点の分析から捉え直す[2]。その上で，エリザベス二世柄など英国でデザインされ，日本で製造，その後アフリカにもたらされた記念用プリント・テキスタイルと独立後に製造された新たな国家の為政者そのほか新生アフリカ国家を表したプリント・テキスタイルを比較することで，記念用プリント・テキスタイルが英国発の国民と王朝帝国の意図的合同である公定ナショナリズム[3]を英領西アフリカ植民地にもたらし，独立後のアフリカ諸国に西欧型国民国家体制をスライドさせ，国民国家体制をより広汎かつ強固なものとする役割を果たしていたことを明らかにする。

1　国民国家の視覚化

今日の多様性と社会包摂を認める社会は，かつてゲルナーが「文化的多元主義は現在の高文化（＝標準化され，読み書き能力と教育とに基礎づけられたコミュニケーションのシステム）が確立した中においては滅びようとしている」[4]と論じているにも関わらず，現代を生きる私たちが日々実感，模索し，時には旧来の思考を改めるきっかけを生み出す道標となっている。逆説的に言えば，同質性と社会的排除からなる世の中を作り出してきた構造について，歴史的検証を行うことが今日的な課題である。

議論の余地はあるものの，同質性と社会的排除の構造の根幹にあり，アンダーソンが「現代においてなお最も普遍的かつ正当な価値である」[5]と説いたのが，近代ヨーロッパが生み出した国民国家制度である。国民国家制度は文化的人造物であるにもかかわらず，モデュール（＝規格化され独自の機能をもつ交換可能な構成要素）が可能であるため，汎用性が高く多様な社会に移植されてきた。ナショナリティ（＝同じ国民だという意識の横の連帯意識と，歴史的連続性の縦の連帯意識が主たる要素）は誰もが「帰属」することができると錯覚され，「帰属」すべきであるとされる形式的な普遍性をもつ。

近代においては，こうした帰属意識をより強化するため，本来多様であるはずの個々人を，国家を形作る国民と一律に見なし，まとめるための手段が考えられてきた。その一つに国民国家を視覚化し，国民が共有する共通のイメージを培っていくやり方がある。なかでも国旗は国民国家を最もわかりやすい形で視覚化し，同様のフォーマットを他国も用いることで，その違いを区別するために用いられる。アンダーソンはまた，国民国家を視覚化する方法に，地

図のロゴ化を挙げている。ロゴとしての地図は，帝国国家が地図の上でその植民地を帝国の色で染めるという慣行に始まった。「はめ絵（ジグソー）」効果が目になじんでくると，それぞれに「ピース（片）」をその地理的文脈からきれいに切り離すことが可能になり，このかたちで，地図は，ポスター，公印，レターヘッド，雑誌・教科書の表紙，テーブルクロス，ホテルの壁などに，無限に複製できるものとなった[6]。切手，絵葉書，学校の教科書などへロゴ化を進行させたのは複製技術すなわち印刷と写真であり，プリント・テキスタイルにも使われている。

ロゴ化は民族衣装の形を取ることがある。横浜で製造されていたスカーフ（横浜製スカーフ）の例を見てみよう。地球儀が中央に描かれているスカーフ「人形」【図 1】は，和装やチロルのディアンドルなど 14 種類の民族衣装を着た人形が手を繋いで並んでいるデザインで，地球上のさまざまな民族の差異を，同じ体型の人形で見せる平等観を表している。とはいえ，肌の色は統一され，民族衣装については，意図的な選択が見られるがゆえ，内容が偏りあるものにかかわらず，地球を中央に据えることであたかも全世界を一覧するような印象を見る側に与えるという問題を孕んでいる。民族もナショナリズムが生み出した虚構であることを，ゲルナーは以下のように説明している。

図 1　07483（認定番号）「人形」（1957 年）人絹塩瀬 28×28 インチ

> 民族を生み出すのはナショナリズムであって，他の仕方を通じてではない。確かに，ナショナリズムは以前から存在し歴史的に継承されてきた文化あるいは文化財の果実を利用するが，しかしナショナリズムはそれらをきわめて選択的に利用し，しかも多くの場合それらを根本的に変造させてしまう。死語が復活され，伝統が捏造され，ほとんど虚構に過ぎない大昔の純粋さが復元されるのである[7]。

1950 年代以降，海外旅行がより身近になったのは交通手段の発達が大きい。50 年代に世界各地にハブ空港を設け，ジェット旅客機での世界一周航路を開拓した米国パンアメリカン航空の広告は「人形」と同様しばしば地球を中心にステレオタイプ化した各地域と民族を表現している。その描写は世界に視野を広げる眼差しを提供しつつも，国家間の差異を際立たせる見方を

図 2　「パン・アメリカン航空は世界中に行ける私の魔法の絨毯だった」*LIFE*，1956 年 3 月 5 日

示している【図 2】。

アンダーソンはまた，国民国家の視覚化には，伝統的な王朝の原理と革新的な国民の原理を統合する傾向があると示している。たとえそれが歴史家エリック・ホブズボームのいう「創られた」伝統[8]であるにせよ，君主の肖像はとりわけ，歴史や伝統らしきものと近代的国民国家を統合したシンボルとして，国民国家の視覚化に多用されてきた。君主の肖像は複製可能なコイン，紙幣，メダル，切手といった政府発行のものから，マグカップ，皿，壁紙などのスーヴェニアにも使われてきた。興味深いのは 1950 年代，蒸留酒の広告で長く愛好されてきた技術と味があるというブランド力を表すのに王室イメージがしばしば結びつけられていることにある。

【図 3】は英国発「ギルビーズジン」の広告で，地球儀と方位磁針の視覚を用いて「世界はギルビーズに賛同するでしょう」と謳っている。王の象徴のダイヤとギルビーズのダイアモンド柄を掛け，ヘンリー八世の肖像を用いることで歴史があること，英国性を表現するとともに，世界中を席巻する英国のイメージが重ねられている。

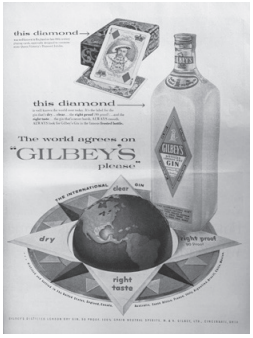

図 3　「世界はギルビーズに賛同するでしょう」*LIFE*, 1956.3.16，17 頁

記念されるべき人物の肖像がプリントされた記念用プリント・テキスタイルの歴史は 18 世紀初頭に遡ることができる。最初期の例に 1710 年トーリー党が総選挙に勝利した際，トーリー党を支持したヘンリー・サッシャバレルの肖像がプリントされた絹のハンカチーフがある。

英国君主がプリントされた記念用テキスタイルの初期の例がジョージ三世を表現したものである。ジョージ三世は 1760 年に即位すると，フランス革命に対する懸念から，君主が国家の運営にもっとも直接的に関与できるような体制を築いた。産業革命が本格化した時期とも重なるため，ジョージ三世柄は広く普及し，その後の君主たちのプリントも量産されるようになる。プリントされている人物が君主であることを示すため，王冠，紋章，さらに国旗，国土，国花，戴冠式に用いる宝珠，笏杖の意匠が組み合わされた。20 世紀に入ると肖像写真のプリントが使われるようになる。【図 4】はエドワード八世の戴冠を記念したハンカチーフだが，国旗のほか，王冠，笏丈，ほこ，*Long live Edward VIII Emperor*（= 国王エドワード八世万歳）の文字が入り，イングランドのバラ，スコットランドの

図 4　英国製「エドワード八世戴冠記念ハンカチーフ」（1936），コットン（平織りにプリント），33.7×33.7cm，CH，1941-61-26

アザミ，アイルランドのシャムロック，ウェールズのリーキとそれぞれの国花が組み合わされている。

元首やリーダーの肖像がプリントされた記念用プリント・テキスタイルならではの特徴は，アフリカに広く普及したことにある。なぜ，肖像柄のプリント・テキスタイルがアフリカで需要があったのかについては，テキスタイルにメッセージ性を込めるアフリカの文化と，記念用プリントテキスタイルとの相性がよかったことが挙げられるが，英国からアフリカに渡った英国君主柄は，英国と植民地，独立後は英連邦アフリカ諸国との結束を高める際に利用する媒体となっていたと考えられることを次に検証する。

2　エリザベス二世の肖像柄プリント・テキスタイル

はじめに述べたように，1950 年代，英領西アフリカに向けて頒布されていたのが，1953 年戴冠式前後のエリザベス二世の肖像イメージを用いた記念用プリント・テキスタイルであった。1959 年に当時の特許庁意匠課長，高田忠が著した『デザイン盗用』で，高田は海外の意匠を盗用した例を挙げているが，その中にエリザベス二世の戴冠式の肖像イメージを用いたスカーフが含まれている。「第 18 図　スカーフ」に提示された盗用例は一度水を通すと，金がはげて，真作とそっくりの柄が現れるといい，日本で手の込んだ盗用がなされていた実態がわかる[9]。真作は，神奈川県商工部，日本輸出スカーフ製造協同組合が編纂した『繊維意匠登録集 外国意匠』第一編（1956 年 3 月）掲載の「意匠番号 1004」と一致する。女王の肖像とともに三獅子が並ぶイングランドの紋章から豹柄の地まで，意匠は同一であり，外国意匠であることが示されている。本作品は「意匠権者（考案者三和貿易社長）江口特男　横浜市中区吉田町 16」によって，特許庁に 1955 年 1 月 17 日登録，同年 8 月 2 日に出願された[10]。江口はもともと外国意匠である本意匠の日本での意匠権者であったことになる。三和貿易はアフリカ向け横浜スカーフ製造業者の最大手であった[11]。本作品もアフリカ向けが想定されたものであったと考えられる。「横浜スカーフ・アーカイブ資料」にはエリザベス二世の肖像柄がほかにも確認され，アフリカに輸出されていた[12]。

図 5 「ファクトリー・プリント布」（1959 年），コットン 119.5×91cm，AM，Object no: 2002-9-5

図 6　04620（認定番号）「三本旗エリザベス」（1957 年）人絹朱子 35×35.25 インチ

女王柄は，英国公文書館で著作権登録されていた。プリント・テキスタイルに使われた衛兵に敬礼する女王の姿【図 5】は「登録デザイン（=REGISTERED DESIGN）」と縁に印刷されているが，同じポーズの女王柄が横浜製スカーフにもある【図 6】。

女王柄の需要があった英領西アフリカ植民地は，第二次世界大戦後の英国にとって最重要地域と成り代わっていたが，1920 年代末以降 UAC が西アフリカの外国貿易の 3 分の 2 ないし，4 分の 3 を扱っていたことからもわかるように，英国のアフリカへの関心は領土ではなく，商業的なものであったので，間接的な統治から緩やかな独立という道筋が想定されていた。記念用プリント・テキスタイルの最大の輸出先であったゴールドコースト，ナイジェリアではすでに自治権の拡大，公務員の内地人化が進められていた時期と重なる。とはいえ，英国が戦後もこれらの地域を完全に手放す方向に働いていなかったことは，歴史家フィリッパ・レヴァインが 1948 年版中央情報局（1946 年創設）「植民地帝国 ── 諸植民地の紹介」の序文に，植民地は「イギリス帝国からの指導と援助がまだ必要なコモンウェルスのユニット」と定義していたことからも明白であると指摘している [13]。緩やかなつながりを保つためにも英国君主に対する崇拝は，異質なものが調和し統合されたイメージを想起させる間接統治政策に欠かせない道具とみなされていた。

近代以前の君主制下にある国家は主権の周辺に行くほど境界が不明瞭であったため，領域のはっきりとしている近代の国民国家とは本来矛盾するものであった。しかし，出版技術が発達することで，君主のイメージも水平的，世俗的，時空間横断的に普及し，同質的な国民国家にあまねく行き渡ることが可能となる。さらにエリザベス二世の時代になると，従来からある肖像写真のみならず，戴冠式が初めて BBC により TV で生中継され，英国から遠く離れた場所にも同時性を持って女王イメージが拡散することとなった。ゲルナーはメディアによって何が伝達されたかよりもメディアそれ自体が重要だとし，「問題は，その浸透性や，抽象的で集積化され，標準化された一から多へのコミュニケーションの重要性であり，伝達される個々のメッセージの中に，何が具体的に含まれるかと言ったことに関係なく，そうしたコミュニケーションそのものが自動的にナショナリズムの中心的な観念を生み出すのである」[14] と言及している。メディアが君主制と国民国家を矛盾しない形で結びつけていた。

図 7　ユーサフ・カーシュ「エリザベス二世」（1951）ブロマイド・プリント 49.7×39.4cm，ナショナル・ポートレート・ギャラリー Accession no.: NPG P1556

ヴィクトリア女王の治世以降は，王族の植民地訪問が頻繁となった。とりわけ戦後の英国はエリザベス二世の度重なる植民地訪問によって，英連邦との結束を固めようとした。女王の訪問の

軌跡を記念用プリントに辿ることができる。【図 7】はカナダの写真家ユーサフ・カーシュ（1908–2002）が 1951 年 7 月 30 日に撮影し，カナダ紙幣に使われた肖像写真である。女王の戴冠前にカナダ国民に向けて撮影されたため，女王は胸にメープルの葉が刺繍されたドレスを着用している。この写真を元にした記念用プリントの例が【図 8】である。植民地時代のナイジェリアの六芒星と旗，楕円花形メダイオンの枠内にエリザベス二世，裾にフィリップ公の肖像がプリントされ，王冠とイギリスの国花であるバラが装飾されている当作品は，アフリカ市場に向けてヨーロッパないしはアジアで製造されていたファクトリー・プリントで，女性のトップスとスカート，肩掛けと頭巾（スカーフ）がちょうどに仕上がるように，6 ヤード単位で売られていた。女王の西アフリカ訪問時にあわせて製造された王室柄は UAC が主導し，配布しており，英国との結びつきを視覚化する役割を果たしていたと言えよう。

カーシュの写真がもととなったスカーフ「エリザベスと王冠」【図 9】は，ナイジェリアの六芒星に王冠のシンボルが共通する。同じくカーシュの写真を転用した例に，アフリカ大陸を掌握するかのように地図の前景に女王の肖像，サファリの風景とともに描かれたシエラレオネ訪問記念プリント【図 10】があり，同じイメージが海を越えて，拡散していたことがわかる。

女王の肖像柄が，独立運動に活気づく英領西アフリカにもたらされた理由を考える際，供給側の英国が，たとえ植民地主義を正当化するための方便であったとはいえ，アフリカ人の教化，文明開化はヨーロッパ諸国の責務であると考える楽観主義的な帝国主義を信奉していたことを踏まえなければならない。製造時期からも，アフリカに輸出されたエリザベス二世の肖像柄スカーフや記念用プリント・テキスタイルは，女王の 1956 年ナイジェリア，1959 年ガーナ，シエラレオネ訪問に合わせて制作されたものである。

図 8 「ファクトリー・プリント」（1959–1960 年）コットン 119.4 ×90.4cm，AM，Object no.; 2002–9–2

図 9　11300（認定番号）「エリザベスと王冠」（1958 年）人絹朱子 32 ×33 インチ

図 10 「ファクトリー・プリント 1959 年シエラレオネ英国王室訪問記念」（1959 年）コットン 120 ×90.1cm，AM，Object no.; 2002–9–3

1959 年のガーナ訪問は女王の出産前後であったため，取りやめられたが，訪問を見越して製造されていた。こう考えるのは白地にインディゴ・ブルー単色の女王訪問記念のファクトリー・プリント【図 11】には「1959 年シエラレオネ」「エリザベス二世」と記されているものの，女王の訪問は女王の出産と重なったため実際の訪問は 1961 年であったからである。シエラレオネも 1961 年にはすでに独立国家となっていたが，女王は訪問を決行した。1961 年に変更された女王のガーナ来訪は，パン＝アフリカニズムと社会主義に政策を転換しようとしていたガーナのンクルマ政権下では危険を伴うと，英国議会は反対していた。しかし，結果的に女王は歓迎をもって迎えられ，ガーナの社会主義化を止めるという英国にとっての外交上の成功がもたらされる。プリントには，ユニオンジャックに王家の紋章，王冠，中央に花輪のメダイヨンに囲まれた女王の肖像，下部には「フリータウン政府庁舎」とラベルされている。「フリータウン政府庁舎」は植民地時代のシエラレオネの紋章（ユニオンジャックに下半分左に解放奴隷，右にカカオの木）が中央に並んだスカーフ「四スミパイナップル」の四辺にもプリントされている。1961 年の訪問は夫のフィリップ公も同行したので，「1961 年英王室訪問」とラベルのあるファクトリー・プリントには，2 人の肖像が楕円形メダイヨンに収められている。フリータウン政府庁舎とともに，両国の王宮，英国ウェストミンスター議事堂が並んでいるのは，独立後も英連邦体制下，英国の影響力を示す意図があったと分析できる。

図 11 「ファクトリー・プリント布」（1959 年）コットン 120.5×93.5cm，AM，Object no.: 2002-9-4

横浜製スカーフは廉価で普及していた。1956 年には女優グレイス・ケリーとモナコ国王レーニエ三世が挙式したことが話題となり，記念用スカーフが製造されたが，5 ドルで販売された記録がある [15]。オーストリア発でアメリカにも展開していた小売業者ウールワースでは日本製（横浜製と思われる）の 33 インチ四方で「とても華やかな花，蝶，バレリーナその他のデザイン」の「スマートなスカーフ　輸入品 6.25 匁」が通常は 1 枚で 79 セントのところ，2 枚で 97 セントの価格で新年のセールの対象となっている [16]。スカーフが消費者に求めやすい価格で，服飾品として広く普及していた時代であったことがわかる。

3　独立前後の記念用プリント・テキスタイル

従来は英国王室柄が主流であったアフリカ向けの記念用プリントテキスタイルに変化が見られるのが，1957 年のガーナを皮切りとした英領西アフリカ植民地の独立直前の頃からであ

る。英国国家のシンボルである王冠や国旗とアフリカの国家シンボルである雄鶏，黄，赤，緑，黒のパン＝アフリカニズムの旗が並置され，宗主国と植民地の関係の対等性が示されるようになった。

『繊維意匠登録集　外国意匠』第三編所収の UAC が所有する意匠には，ガーナ訪問記念用スカーフで，女王の肖像を囲むようにガーナの国旗，「エリザベス二世」「ガーナ 1959 年」と明記され，四隅には女王の同一の肖像と連合王国の国花がプリントされている。ガーナの国旗が女王の肖像の真横ではためくデザインは，独立後のガーナと支配者であった英国とのパワーバランスを暗示している。

1957 年に，ガーナで新政権が誕生した際為政者側であった UAC から贈られた初代首相ンクルマの肖像柄ファクトリー・プリントが【図 12】である。このプリントがどのように使われたかを明示しているのが，独立記念を祝った当時を撮影した写真【図 13】である。プリントには花輪に囲まれた，写真から転載されたンクルマの肖像が中央にあり，「ガーナの首相クワメ・ンクルマ博士」と記されている。肖像をガーナの国旗に使われた，赤，黄，緑の 3 色と「1957 年 3 月 6 日ガーナ独立記念日」「自由と正義」のスローガン，国旗の黒いひとつ星と黄色で枠を取ったガーナの国の形，花が取り囲んでいる。使用されている色はパン＝アフリカニズムに呼応しているが，旗や文字に花，元首の肖像写真を使用するデザインは【図 14】に類似している。

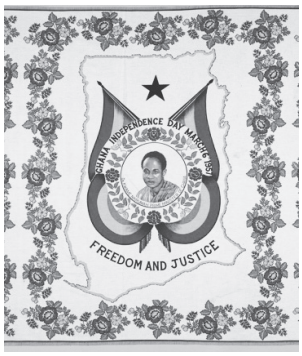

図 12 「ガーナ独立記念日」（1957 年）ファクトリー・プリント コットン，CH，Accession no.: 1992-189-1

このようにガーナではンクルマが新たな記念プリント柄の対象となり，1966 年にンクルマが軍事クーデタで失脚するまでは，横浜でもンクルマ柄のスカーフが製造された。四隅と中央にンクルマの肖像，ガーナの旗が交差し，「自由と正義」と書かれた横断幕，「3 月 6 日，1957 年，ガーナ」と独立記念日を記した横断幕，四辺にガーナ独立後新たにエリザベス二世によって与えられた国章の部分は，米国国立アフリカ美術館所蔵の同年に製造されたファクトリー・プリントの意匠【図 14】に共通するが，コピーが繰り返される途上で，元の肖像写真からやや乖離する傾向は否めない。当時の日本（横浜）がアフリカに対して持っていたステレオタイプなイメージが投影されていたと考えられ，それは 20 世紀を通じて根

図 13 「ガーナが生まれた［アクラのバーで独立を祝う写真］」（1957 年撮影），ガーナ・インフォメーション・サービス
［出典：Paul Faber, *Long Live the President! Portrait-cloths from Africa*, Amsterdam: KIT Publishers, 2010, p. 15］

強いものであったと言える[17]。

今回の調査で，網地のパターン，メダイヨン，幕など肖像以外の部分を転用している例が判明した。【図14】とカーシュの写真がもととなった「1956年ナイジェリア」と表記のある【図15】を比較されたい。【図15】は【図8】にも転用されている。記念用プリント・テキスタイルの場合，時事ニュースに合ったスピード感が求められるゆえ，為政者の肖像のみを変更してデザインを複製することが行われていたといえよう。複製が繰り返されたことが，西洋型近代国家の視覚のあり方が独立後のアフリカ諸国にも継承され，汎用性を高めた要因の一つとなったと考察できる。

図14 「ンクルマ首相」（1957年）ファクトリー・プリント，50.2cm幅で繰り返し，AM，Object no.: 2002-9-32

図15 「記念用プリント・テキスタイル」［部分］（1956年）コットン122×165cm

ここまで見た事例からわかるように，国民国家の視覚化もまたモデュール化し，プリント・テキスタイルに反映されていた。さらに英領西アフリカ向け横浜製スカーフのデザインのヴァリエーションから，国民国家制度を支える構造の視覚化も独立後スライドしていったことがわかる。とりわけ国民国家制度を強固なものにするための要素に，ゲルナーのいう高文化の確立が挙げられる。独立前からすでに宗主国の教育制度，内容，方法ならびに思想は植民地に引き写され，英領西アフリカ植民地の学生が，英国の憲法，地理，歴史，文学を学び続けていた。独立後のアフリカ諸国の新たな支配層となったのは，このような近代的教育を受けた二重言語読み書き能力のあるエリート層である。先にあげた初代ガーナ首相ンクルマは，1927年に植民地総督ゴードン・グッギスバーグが旗振り役となり，植民地国家によってアクラに設立されたアチモタ・カレッジに創立年に入学している。アチモタはゴールドコーストの教育ピラミッドの頂点に立ち，独立後は次世代が後継者になることを学ぶ場所となった。英国化することは，出世の機会を大勢の本国人中産階級－役人，学校教師，商人，植民者に提供していた。二つの言語を使いこなすということは，すなわち，ヨーロッパ国家語を経由して，ナショナリズム，国民，国民国家のモデルを手に入れることができるということに等しかった[18]。教育によって大英帝国は，アフリカのみならず，すべての大陸に散在していた。

現地の人びとに対しては，当初キリスト教伝道団によって西欧型の教育が導入されていた。横浜ではナイジェリアで英国聖公会宣教協会の活動百周年を祝った記念用スカーフも製造さ

れた。宣教師たちは現地の人びとの「無知と道徳的貧困からの救済」[19] を目指していたため，時おり植民地官僚に敵意を向けられる存在であったが，医療，ミッション・スクールの設置，クリスチャン・ネームを与えるなどの活動は，図らずも英国から遠く離れた場所での帝国的統治を支えることにつながった。

アフリカで 20 世紀前後から様々なヴァリエーションで製造されていた子ども用レタリング文字板の形をとった通称 ABCD 柄，小学校柄，コンパスや定規，書物やインクペンは西欧型教育のアフリカでの普及を促進するものである。ABCD 柄は形を変え，現代では周囲を飾る文具にパソコンが登場したり，四角い枠に標語や人名が書かれたプリント・テキスタイルに応用され，アフリカン・プリントとして定着している。

歴史の叙述もヨーロッパで「国民の歴史」と考えられ，また書かれるようになったものが祝典によってばかりでなく，図書室と学校の教室を通して植民地住民の意識のなかに不可避的に持ち込まれ，言語以外に「共有された歴史的経験」[20] が潜在的ナショナリズムを生み出した。

独立後の最大の課題は，統一的国民国家の形成と国民の生活水準向上を目標とする経済的・社会的発展にあった。横浜製スカーフにプリントされた国立銀行，国会議事堂，地方議員会館などは国民国家制度を支える政治的・経済的紐帯を表している [21]。これらの公共建造物は西洋の公共建造物に倣った新古典様式ないしはモダニズム様式が使われ，建築においてもモデュール化が進んでいたことが同時に示されている。

図 16 『DRUM』1957 年 4 月号表紙

アフリカ諸国の独立期には西欧型国民国家の視覚が持ち込まれる一方で，一見それとは相反するように「伝統」を強調し，アフリカのアイデンティーを視覚化し，確立しようとする動きもあった。あらためて【図 12】【図 14】の肖像に注目してみると，ンクルマが着用しているのは *Mmeeda*（「これまでに起こったことのない何か」の意）柄のケンテで，ゴールドコーストのアサンテ王族やエウェ人の男性が着用していた幾何学柄の民族衣装である。ケンテは 4〜8 インチ幅の短冊を並べて縫ったもので 300 種類以上あり，それぞれの柄に諺にちなんだ意味がある。ケンテを着用した姿はンクルマの肖像で最もよく知られており，南アフリカ共和国で発行されていた急進的な雑誌 *Drum* の表紙やンクルマが米・加国を訪問した記念に刷られた絵

図 17 「クワメ・ンクルマ博士」（1958 年頃）絵葉書，14×9cm，AM，EEPA GH 1985-015

葉書にも使われている【図 16】【図 17】。ンクルマが 1951 年 2 月 12 日に釈放された日以来公の場で意識的にケンテと洋装を使い分けて着用するようになったのは，ガーナの「伝統」を体現する意図があった。そもそもガーナという国名は古代アフリカにあった王国の名称を採用しているが，その領土は重ならない点からも，「伝統」が引用，新たに創造された経緯がある。民族衣装と洋装を使い分けたンクルマの姿は，英国式教育を受け，英連邦内にとどまったガーナの立ち位置を表すとともに，新たな国家のアイデンティティーを体現するものであった。

図 18 （左）ロバート・ヴィックレー「ナセル肖像」（1963）テンペラ，インク，44.1×32.8cm，スミソニアン・ナショナル・ポートレート・ギャラリー NPG.78.TC612
（右）『TIME』（1963.3.29）表紙

同時代，エジプトを主導しアラブ主義を提唱したガマール・アブドゥル＝ナセルはンクルマよりさらに伝統と近代国家を意識的に視覚化した演出をしていた【図 18】。ナセルの肖像には古代エジプトのイメージが重なり，ナセルを描写した横浜製スカーフは，軍服姿のナセルとともに伝統に依拠したアラベスク模様と四隅にイスラム教のシンボルである月と星が組み合わされている。

伝統を見出す動きも国際社会の中で差異化を図る，つまり他者あっての自己という認識に立てば，事実上近代化という同じプラットフォームから生じていた。すなわち，モダニティを志向する動きと表裏一体であったということが指摘できる。ただし，ンクルマは一国を超えたパン＝アフリカ主義を，ナセルはパン＝アラブ主義を目指し，国民国家という枠組みを離れた民族主義を目指していく。西欧型国民国家を超克したところに理想を見出していったが，両者の試みは多様な民族からなる国内の抵抗に遭い，頓挫することとなった。アフリカ諸国では新たな為政者が記念用プリント・テキスタイルのモチーフとなり，その「伝統」は今日まで続いている。

おわりに

本論で取り上げた国民国家を視覚化した記念用プリント・テキスタイルが英領西アフリカ植民地で受け入れられたのは，植民地時代に英国の公定ナショナリズムがアフリカの文化と歴史に入り込んでいたこと，アフリカ諸国のほとんどは複数の民族からなる部族的多様性が特徴であったが，独立当初近代的国家を作る際，諸民族を同質化させていく方向ですすめら

れたゆえ，英国式の国民国家制度が踏襲されたこと，英国式教育を受けたエリート層が支配者となり，ヨーロッパ言語を国家行政の媒体として使用し続けヨーロッパの高文化とつながりを持ったこと，植民地時代，1884〜85 年のベルリン会議で引かれた国境をそのまま受け継いだことが諸要因に挙げられる。

エリザベス二世柄から新生アフリカ国家の表象に至る記念用プリントテキスタイルは，旧宗主国である英国が用いていた教育や政治，経済など西欧型近代国家システムを旧植民地である英領西アフリカに浸透させる手段となっていた。プリント・テキスタイルのデザインから，近代化，欧米化が進めばアフリカの「伝統的部族」は解体・消滅し，国民国家という一つの同質的な共同体ができあがると考えるアフリカ諸国独立の直後に席巻したイデオロギーを捉えられる。1966 年以降，英国でデザインされたアフリカ向け横浜製スカーフの輸出が途絶えたのが，同年にンクルマが軍事クーデタで失脚，同じ年のナイジェリア，翌年のシエラレオネで相次いだクーデタと軌を一にしているのは，西欧型国民国家制度を視覚化した記念用プリント・テキスタイルがその役割を終えたことの証左である。

＊図 1，6，9 は「横浜スカーフ・アーカイブ資料」より。同アーカイブは 1957 年から 1986 年まで日本輸出スカーフ等製造協同組合によって意匠保全認定登録されたスカーフ見本約 11 万点，記録台帳約 15 万点からなる。2022 年 7 月，横浜市歴史博物館に移管された。図版キャプション中「認定番号」は台帳に記録された通し番号。

＊図版キャプション中，AM ＝国立アフリカ美術館，CH= クーパー・ヒューイット・スミソニアン・デザイン・ミュージアムの略を使用。

＊図 16 は井谷善恵氏所蔵。

註

1　拙論「アフリカに輸出された横浜輸出スカーフ ── UAC（United Africa Company）との関連を中心に」『デザイン理論』76，2020 年，76-85 頁。

2　記念用プリントテキスタイルを政治史の観点から考察した主な先行研究には以下のものが挙げられる。1）Debra S. Boyd, *Wax Prints of the Sahel. Cloth Portraits of Contemporary African History,* AWP, 2021. 2）Jean Allman, *Fashioning Africa: Power and the Politics of Dress*, Indiana University Press, 2004. 3）Paul Faber, *Long live the President!: Portrait-Cloths from Africa,* Kit Press, 2010.

3　アンダーソンは国民と王朝帝国の意図的合同である公定ナショナリズムが非ヨーロッパの文化と歴史に入り込んで屈折，採用，模倣されたことを指摘している［ベネディクト・アンダーソン著，白石隆，白石さや訳『定本　想像の共同体 ── ナショナリズムの起源と流行』，書籍工房早山，2007 年，175 頁］。

4　アーネスト・ゲルナー著，加藤節訳『民族とナショナリズム』岩波書店，2000 年，93 頁。

5　アンダーソン，20 頁。
6　アンダーソン，280–290 頁。ルイーズ・M・ニューマンがアメリカを例にロゴ地図が国家認識を表し，他者を不可視化すると指摘しているように，国土を形にし，切り離したロゴ化は，国民国家意識形成に欠かせない視覚である［荒木和華子・福本圭介編著『帝国のヴェール ── 人種・ジェンダー・ポストコロニアリズムから解く世界』明石書店，2021 年，52–54 頁］。
7　ゲルナー，95 頁。
8　エリック・ホブズボウム，テレンス・レンジャー編，前川啓治ほか訳『創られた伝統』紀伊國屋書店，文化人類学叢書，1992 年。
9　高田忠『デザイン盗用』日本発明新聞社，1959 年，14 頁。
10 特許庁意匠公報「117880」，江口特男（意匠権者（考案者）），1955 年 8 月 2 日出願，1955 年 1 月 17 日登録。
11 江口特男「私のリレキ書」『スカーフ』日本輸出スカーフ製造協同組合，167 号，1973 年 4 月 15 日，(3)。
12「横浜スカーフ・アーカイブ資料」データベース（横浜市中央図書館所蔵）より。
13 フィリッパ・レヴァイン著，並河葉子ほか訳『イギリス帝国史　移民，ジェンダー，植民地へのまなざしから』昭和堂，2021 年，151 頁。
14 ゲルナー，212 頁。
15 ‘Here Comes Bride: Souvenir Kerchiefs’，*LIFE*, April 9, 1956, p. 48.
16 *LIFE*, January 9, 1956, unpaginated.
17 ジョン・G・ラッセル『日本人の黒人観』（新評論，1991 年）には，「ちびくろサンボ」の描写に示されるような日本人の黒人に対する眼差しが 1991 年当時においてもなお差別的なものであったことが例証されている。
18 アンダーソン，192 頁。
19 レヴァイン，148 頁。
20 ゲルナー，81 頁。
21 西川長夫『植民地主義の時代を生きて』平凡社，2013 年，24 頁。

Visualization of the Nation-State in Commemorative Prints and Textiles: From the 1953 Coronation of Queen Elizabeth II to the Image of the New African Nation

MONDEN, Sonoko

Factory prints based on portrait images of Queen Elizabeth II around her coronation and printing scarves manufactured in Yokohama were exported mainly to British West African colonies in the late 1950s. Why were commemorative prints using portrait images of sovereigns such as Queen Elizabeth II manufactured and exported to the British West African colonies at the height of the anti-colonial nationalist movement? This thesis will examine the background of the proliferation of the image of the suzerain monarch in Africa on the eve of independence, based on the theories of political scientist Benedict Anderson and historian Ernest Gellner, as well as the establishment of the African nation-state system and the visualization of this system.

Commemorative printed textiles were a means of introducing the modern Western system of education, politics, and economics used by the former sovereign nation, the United Kingdom, to the former colonies. It is possible to capture the ideology espoused by African nations at the time of their independence that modernization and Westernization would lead to the creation of homogeneous communities of nation-states.